

全国規模の大会が続々開催

熱戦再来！

ウエイトリフティング

重量挙げともいわれるウエイトリフティング競技。平成23年には全国高等学校総合体育大会（インターハイ）、28年には国民体育大会のウエイトリフティング競技が本市で開催されます。ここでは競技のルールや魅力、来年に迫ったインターハイに向けての取り組みなどを紹介します。

競技の概要とルール

ウエイトリフティングは、バーベルを挙げた重量を競う競技です。1896年の近代オリンピック第1回大会から行われている歴史あるスポーツで、シドニーオリンピックからは女子競技も正式種目として採用されています。おとし行われた北京オリンピックでは、メダリストを父に持つ三宅宏実選手が出場し、注目を集めました。テレビで競技をご覧になった人もいないではないでしょうか。ウエイトリフティングは体重別に階級が分かれており、それぞれの階級で順位を決めます。

男子は53kg級から105kg級の9階級、女子は48kg級から75kg級の7階級で、競技2時間前に計量が行われます。競技は、バーベルを床から一気に頭上まで持ち上げる「スナッチ」と、バーベルを一度胸に乗せてから頭上に持ち上げる「クリーン&ジャーク」の2種目で構成（左下連続写真参照）。それぞれ3回ずつ挑戦し、両種目の最高重量の合計で順位を競います。挑戦する重量は選手自身が選択でき、試技に成功すると1kg単位で増量することが可能です。失敗した場合は、同じ重量以上に挑戦しなければなりません。判定は3人のレフリー（審判

員）によって行われ、多数決で決められます。判定機に白が2つ以上表示されれば成功、赤が2つ以上表示されれば失敗です。ただし、レフリーの判定の正否を審査するジュリーと呼ばれる審判も判定しており、判定が覆されることもあります。より重い重量を挙げた選手が勝者となりますが、同記録の場合は体重の軽い選手が勝者となります。また、同記録で同体重の場合は先に成功させた選手が勝ちというルールもあります。

いろいろと説明しましたが、ウエイトリフティングの基本は「どれだけ重いものを持ち上げられるか」ということへの挑戦です。人としての限界に挑戦する選手たちのひたむきな姿こそウエイトリフティング最大の魅力だといえます。

本市の歴史と実績

本市とウエイトリフティングとのかわりには、いつごろ始まったのでしょうか。時代は昭和39年、東京オリンピックの年にまでさかのぼります。旧江刺市を会場に、東京オリンピックの日本代表を決める選考会が開かれたのです。地方での開催は初めてでしたが、東北地方に代表候補選手が多かったことや、市側の強い要望があつて実現し

たといわれています。会場となった岩谷堂農林高校体育館には大勢の観客が詰め掛け、間近で全国レベルの戦いを観戦しました。大会は世界新記録や日本新記録が幾つも生まれ、関係者の努力で大会運営も成功に終わっています。県内から代表選手は生まれませんでした。東京オリンピックでは、三宅義信選手が男子フェザー級で金メダルを獲得。オリンピックの選考会場となった地元にも、最高の結果をもたらしました。

この大会がきっかけとなって、胆江管内の高校に部や同好会が誕生していきます。その後も全国規模の大会が開かれるようになり、昭和45年には国民体育大会を開催。これに伴いウエイトリフティング協会も発足しました。また、平成11年にはインターハイが開かれるなど、県内のウエイトリフティング競技開催地として定着してきます。

こうして、競技のすそ野が徐々に広がり、市内から全国に通用する選手が誕生します。昭和61年のインターハイでは、岩谷堂農林高校の高橋克彦選手が52kg級で優勝しました。近年では、平成18年の国民体育大会で、同校の三嶋平選手が少年56kg級のスナッチで優勝。総合でも2位というすばらしい結果を残しています。

